

法華玄義に於ける教相について

池田 宗 讓

法華玄義所説の教相については、日本天台に於て、いわゆる一十教相として一箇の論目とされていたようである（『法華玄義釈義』第十二^一）。一方、天台教相論は、現在に至るまで、諦觀の五時八教判を以て論じられている。ところが、既に最近の学会に於て知られる通り、関口真大博士によつて、「五時八教は天台の教判にあらざる」ことが論じられているのを契機として、法華玄義の教相論、特に一卷教相と十卷教相の同異が論議されることとなつた。一体、智顗は法華玄義に於て、何を我が教相なりとしたのであろうか。ここで、諦觀の五時八教判を考慮しつつ、一卷教相と十卷教相の構造についてみてみたい。

一卷教相の根性融不融相の原理に基づく教相論は、「雖復甚多亦不出漸頓不定秘密」（天台大師全集『法華玄義』卷一、二二四頁、以下は卷頁数のみ記す）と説かれる通り、頓漸不定（秘密）の三種が主枢となる。さて、説の内容は、まず頓漸を開して五段とし、次に不定教を説き、最後に法華を結するといふ構造になつてゐる。頓漸五段の各段は概ね、（一）三照喻、（二）經を掲げ、（三）約法被縁によつて頓漸を定め、（四）約説次第によつて五味を配するといふ構成になつてゐる。この五段の説は、（一）經を掲げていることについてみれば、華嚴、三藏、淨名、大品、今經（法華）の五部の次第であるから、諦觀録

の五時の分類と同じといえる。しかし、これは五時というよりは、むしろ、（四）約説次第の五味の分類によるものと思われる。頓漸不定を基本とし、五味説によつて五段階に開かれるのである。

頓漸についてみる。第一は、「如初出前照高山。厚植善根感斯頓説……此如華嚴……約法被縁得大益名頓教相。約説次第名從牛出乳味相。」（卷一、一五六）と説かれる。即ち、華嚴は頓漸についてみれば頓、五味では乳味とする。ここに頓というも、「頓説」は初頓、頓かに説くので、機根に關せず高度の教えを頓かに説く。この場合、「頓説」は乳味に対して意味を成さない。「頓教相」という場合は、「約法被縁」で大機の大益を得る方面で、十卷にいう「醍醐」（卷十、五一四）に相当する。ここに頓とするは、教説内容と機根との相応不相応に關わることで、即ち、五味によれば、相応すれば頓教相で醍醐、不相応ならば乳味となる。諦觀の五時八教判では、頓は化儀で華嚴部であり、「頓教相」の方面は説かれない。

次に、漸教（卷一、一六八以後）は三藏乃至法華の四段が説かれる。三藏方等般若は、「漸教」あるいは「漸教相」、法華は「漸教」と説かれる。これは全て「約法被縁」即ち、教説内容と聴衆の機根との相応することに約して「漸教相」とされるのである。更に、法華について、「今法華。是顯露非秘密。是漸頓非漸漸。是合非不合。是醍醐非四味。是定非不定。」（二二四頁）と説かれる。これ、漸頓に説法形式（化儀）と教説内容（化法）の用法がある如くである。即ち、法華は漸説の第五番目の教えとすれば漸の攝であり、教説内容からすれば頓教とする如くである。従つて、以上の説の中で、頓漸を化儀のみとしてみるならば、法華の頓は成立しない。教説内容（化法）と機根との相応關係に於て漸頓が開説されるとみるべきで

ある。五味説が原理となつてゐる。因みに、諦観録の如く、化儀の下では頓はあくまで第一時華嚴のみであるから、法華の優位性を示す為には「非頓非漸」とせざるを得ない。以上、一卷教相は頓漸不定の三種を主軸とし、五味説に基づいて華嚴乃至法華の五段が開説される。頓は、華嚴に於ては説法形式上「頓説」、教説内容と機根とが相応する場合「頓教相」とありとする。法華は説の次第からは説法形式上漸で、教説内容上頓である。三蔵乃至大品は漸説と漸解で、説法形式と教説内容とが機根に於て相応する。一卷教相は頓漸不定の教説内容と機根との相応関係―根性融不融相、五味説―の展開を説くもので、この意味で、頓教相、漸教相、法華漸頓と説かれる。

十卷教相「大綱三種。一頓。二漸。三不定。此三名同旧義異也云云。今釈此三教各作二解。一約教門解。二約觀門解。」(卷十、四九二)。智顗はここで、教相の大綱は頓漸不定の三種であり、これは名は旧に同じいけれども意味は異なるとする。頓教は、華嚴・淨名・大品・法華・涅槃等の説を出して、「諸大乘經如此意義類例皆名頓教相也。非頓教部也。」と説く。ここに「頓教相」というのは教説内容についていうのであり、「頓教部」とは所謂南三北七の華嚴のみを頓とする説(卷十、三九三)をいつたものであらう。ここに智顗が「頓教相」というのは、前に「此三名同旧義異也」と主張せるところのもので、一卷教相の言をかりていえば、「約法被縁」で頓の大益を得る方面であらう。次に、漸教は、「如涅槃十三云。從仏出十二部經。從十二部經出修多羅。從修多羅出方等經。從方等經出般若。從般若出涅槃。如此等意是漸教相也。」と説明する。即ち、漸教相とは、機根に相応して漸々に諸教が説かれる相をいつたものである。これは、機根と教法との相応関係の次第を記せるもので、一卷

教相には問答を出して、「問既以五味分別。那同稱漸。答約漸得明五味耳」といつてゐる如く、漸教相の次第と五味相生説とは一体の関係にある。十卷教相では第一大綱章を竟つて、第二引三文証章で、頓教相漸教相を開いて、初頓乃至第五時教とする。この分類は一卷教相と同じい。初頓は華嚴、以下三蔵より法華に至るまでは漸に摂せられる。また、法華は「円頓法華教」(五四五頁)と説かれる。十卷教相に於ける智顗の立場は、華嚴のみを頓とすることへの論難であつて(卷十、三九八、明難)、大綱の章の頓教相が智顗の主張せるところであらう。ところが、これを説の次第に配して説くときは、一卷教相も同じく、初頓華嚴、法華漸・頓、第五時教円頓法華教と説かれる。これは、根性融不融相の判別原理、五味説に基づくものと考えられる。華嚴は「初頓」で機根に関わりなく説かれたもので、初心の人は初味(乳味)、当体円頓得悟の者は醍醐(卷十、五二四)、頓教相を有する。法華は漸の後、機根の融ぜる者に説かれた円頓教であつて、華嚴と斎しいものである(卷十、五四八)。これ一卷に「漸頓」と説かれるものである。

以上、法華玄義の教相論は頓教(相)・漸教(相)・不定教(相)の三種と五味によつて説かれる。教は得益を目的とし、得益は教と機との相応の上に成立する。頓漸不定の相は教と機との相応如何によつて成立する。華嚴乃至法華の次第は教自体の優劣次第ではなく、機に五味の差別がある故に、頓漸不定が具体的に開説されると見るべきである。この点、一卷教相と十卷教相は別のものを説いたものではないといえる。従つて、これを単に「五時」とし、この下に頓漸不定を「化儀」として図式化する教相論では玄義の教相は説明できない。(右に於て、不定についての論述は割愛した)。